昭和30年12月5日 第3種郵便物認可 （日曜・祝日の翌日休刊） 社団法人日本地方新聞協会加盟 （日刊）

第18480号

岳陽新聞

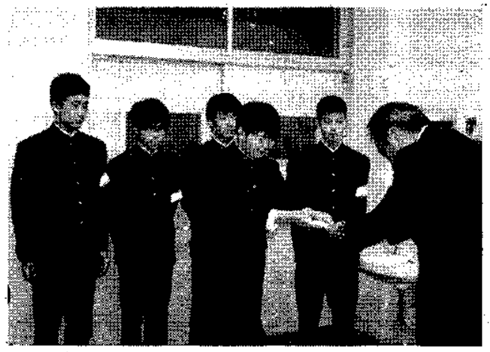
3月20日 火曜日
2018年（平成30年）

発行所 岳陽新聞社
〒418-0002 富士宮市中原町7番地
☎（0544）24-9050 FAX（0544）24-9007
購読料1か月630円 1部売り50円

総合建設業
株式会社大石組
富士宮市弓沢町635番地
TEL0544-26-0010・FAX24-5232

「希望の森を、ずっとみんなの憩いの場に」

『井中屋』売上一部を寄付で地域貢献に



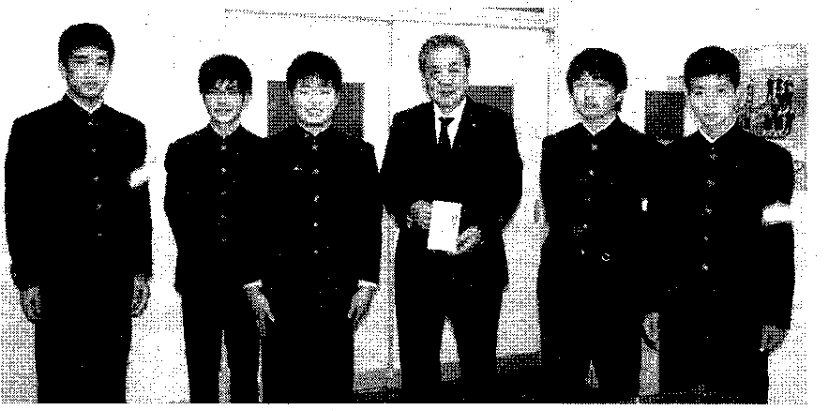
「希望の森のために」と寄附金を手渡し

井中屋（井之頭中学校・起業体験疑似会社・赤池晃太朗社長）は19日、市立井之頭中学校で「希望の森を育てる会（佐野順一会長）」に寄付を行なった。

起業して12年目となった同店は社員らで相談し、昨年11月に開いたイベントの約58万円売上げ（利益約9万円）から一部、地元民が大切に守り育てている学校林「希望の森」への寄付を決定。これまで売上げ金は来年度の必要経費などに活用していたが、今年度はほぼ半分の売上を地域資源の保全活用のためにと、初の寄付を行なうこととなった。

同日、3年生の赤池社長はじめ2年生役員4人は、「希望の森を美しく保つために役立てて下さい」と、佐野会長に寄付金4万円を手渡した。

佐野会長は「みんなが成人してこの地に戻ってもらえるよう、森の保全に役立てます」と感謝を表した。



地域全体で森を守る姿勢示し

富士宮経済NEWS

「農家民宿」＋「農福連携」で既存資源を活かす

豊田由美さん、成功ノウハウ語り

富士宮高校会議所

富士宮高校会議所（中村真緒会頭）は17日、西町レトロ館で「ちゃ の生　豊田由美さんを囲んで座談会〜富士山の麓でできること〜人が集まるのには理由がある〜」を開催した。

「私たちの日常を観光資源に」

富士市出身の豊田由美さんは結婚を機に浜松市に住んでいたが、両親の死をきっかけに故郷富士市で農業活動を行うようになる。

始めはレストランを開き、旬の野菜を中心としたプレートランチを提供していたが当時、国が進めていた「グリーンツーリズム」事業で、地方の美しい自然と農業を体験する観光に着目し、県内にはなかった「農家民宿」事業を思い立つ。

「県の許可がおりるまでが一番つらかった」と話す豊田さんは、前例のない事業をそれでもあきらめず、ジュースやジャムを作って食べるブルーベリー狩りと、製茶して飲むことができる茶摘みを中心とした「体験型農業」ができる民宿を開業。

現在は完全予約制一泊9800円（税抜き）で関東圏中心に海外からも「農業体験」を求めた宿泊客が押し寄せるようになった。

豊田さんは「今、多くの人たちは、ただ泊まるだけでなく体験をしたがっている」と話し、「私たちにとっての日常は、観光客からすれば非日常ということを常に意識し、お客様から学びながら新しい情報や体験を提供することが大切」と成功の極意を披露した。

高校生からの相談を聞く豊田さん

また、障がい者雇用と人手不足解消を両立し、地域貢献に結びつけた実績について「実際に就労を見てもらい、地域の人たちへの理解につなげています」と語り、農福連携により「一人じゃできないことでも、人の手を借りることで可能となること」や「障がいがあっても働くことが生きがいとなる」と説明した。

参加した約40人は、市内でも準備が進む農家民宿事業への関心や事業展開ノウハウについて学びながら、魅力あふれる豊田さんの話に引き込まれていた。

続いて開かれた高校会議所メンバーとの座談会では、資金問題や事業実行力不足を訴えるメンバーたちに「まずはサービス提供するターゲットを絞り、一年間で一つの事業を試行し、実績を積み重ねることが大切」と話し、「どの年代にもでなく、ターゲットへの集中サービス特化で話題や関心を集め、満足度を高めることが次につながる」とアドバイスを送った。

ふじおろし

『事実報道を阻むもの』

◆本欄「ふじおろし」は、前社長の田中昌次翁（故人）から引き継いだもので、これまでに3500編を超えて読んでいただきました。

警察官を退いてから市民相談員・人権擁護委員を経て本紙の代表を長く務めた田中翁は出社すると一番に特製の原稿用紙に推敲を重ね思いを込め綴った「ふじおろし」を編集者へ手渡し、取材現場に記者と同行して多くの人から情報を仕入れ、記者に「市民・読者から寄せられる情報は『生のもの』だ。『生の声』を拾い、市民の声に耳を傾けて真実に迫らなければならない」と、長い刑事経験から事実の積み重ねによる事実真相に追った取材を指導した。

自らも「おかしいことはおかしいと検証を続け」問題に追った事件で、これ以上の追及を恐れた政治家に名誉棄損で訴えられたこともあった。

その時でも、「これだけの事実がある。時間が経てば明らかになる。決して恐れはしない。事実を覆い隠すことは出来ない。事実を解明されては困る政治家や権力を振りかざす者は、真実追及のペンを折ろうと手段を選ばず圧力をかけてくる。だが新聞は『新しいことを聞く』と書くように、読者に新しいこと、知りたいこと、知らせたいことを伝えるものでなければならない」と信念を語り、将来、経営や営業に圧力をかけ発行を差し止め記者を排除しようとして『真実報道を拒むもの』が出てくることを予測し、「新聞を止めようと圧力をかけてくる者が出てくることもあるだろう。抑圧に立ち向かわなければならない時は信念に基づき毅然としてペンを奮わなければならない」、「一時の荒波に打ちのめされることもあるだろう。だが倒れたら、また立ち上がればいいのだ。愚直にまっすぐ流されずに」と遺言を残している。

「権力に寄り添って迎合し市民に事実を伝えるべきペンを汚し広報の手先になってはならない」が田中翁の口癖だったが、「読者の声を聞き視点は常にあたたかく」「読者の知りたいこと、伝えたいことは出来るだけ細かく、思いは熱く」「明確な論点を持った提言と話題提供は幅広く」「真実に迫る取材記事は検証に基づきより深く」、『岳陽』の取材・紙面編集の原点となるのが田中翁の「事実の積み重ねにより真相に追る」精神で、伝えるべき『記者魂』がそこにあるのです。

◆朝日新聞阪神支局が右翼行動派の襲撃で記者が殺害された事件（1987年5月3日）に見られるように不都合な事実報道を抑えこもうと非道なあらぬ暴力を使う者もいる。言論封じ込めや真実報道を阻むものは、どんな時代にもあるものです。

18日の農業者研修大会で東京大学の鈴木宣弘教授が、国が進める農協改革と農業を取り巻く環境変化について解説し「自分たちの安全・安心な食と地域の暮しは自分たちで守る」と問いかけ、酪農・農業をめぐる内外情勢と食・農・暮らしを守る処方箋について「最終的には勇気をもって真実を伝える人々と国民（消費者）の行動が事態を動かす」と時代に立ち向かう意味を問いかけられたが、「勇気をもって真実を伝える人々の行動が事態を動かす」の問いかけは、田中翁の「事実の積み重ねにより真相に追る」精神『記者魂』に通じるものでした。ある賢者は「まっすぐなことばかりが通用する社会ではない」と教えを語ってくれます、不都合な事実報道を抑えむため新聞を止めようと圧力をかけてくる者に抗するには「ペンは剣より強し」とは言えないのが現実です。事実の報道は非道な圧力で窮地に立たされることもあります。

水曜日は
大野水産魚センター
特売日です
富士宮市淀平町181
電話26-2474

従業員募集
■新聞配達、販売
■朝のアルバイト
健康の維持の為に・各種保険制度有り
毎日新聞・静岡新聞 鈴木新聞店
富士宮市小泉一一二四の一 ☎二六-三一八五（代）

あなたのお部屋の相談室
5cm平方の見本帳では、イメージできません。
250cm丈の現品でお部屋に合ったカーテンを!!
●カーテンを作って50年●
ルームフジ
神田通り　本町通り　フラワー通り　元長崎屋　旧ハニーボウル　旧139号線　富士宮駅　ルームフジ
富士宮市中央町12-14 ☎0544-24-2551

指出泌尿器科
富士宮市朝日町九番五号
電話(24)3511(代)